論文要旨

1.　グエン・ゴック・タン・タム（ベトナム）

「日越女性の社会進出の変遷　ー仕事に対する考え方の変化を中心にー」

キーワード：女性の社会進出、M 字型、逆 U 字型、兼業主婦型、継続職業型

要旨：

本稿では日本・ベトナム女性の仕事に対する考え方の変化を踏まえ、両国の共通点・相違点を分析していく。

日本女性の働き方に関して戦前、戦後、高度成長期、安定成長期、バブル期以降に分けて説明した。戦前は家業のみに従事する女性が多かった。戦後から女工、職業婦人等の仕事に就く女性が誕生し、高度成長期から安定成長期にかけて兼業主婦型が増加した。日本女性の労働の特徴は M 字型(結婚・出産で仕事を辞め、再就職する)で表されるが、バブル期以降、兼業主婦型と継続職業型の増加に伴い逆 U 字型(結婚・出産しても仕事を継続する)へと変化しつつある。また、ベトナム女性の労働の特徴はU字型で表される。古代からベトナム女性は家事・育児と労働の二重負担を背負っているからである。ベトナム戦争前は家父長制により女性労働は補助的であったが、戦後は社会進出している。

両国の女性の社会進出は進んでいるが、男女の賃金格差や家事分担等の問題を解決することが課題となっている。

2.　高美景（こ　みぎょん・韓国）

「韓日笑芸の盛衰　ー漫談と漫才にみる文化的相違ー」

キーワード：変化する日本の漫才、消えゆく韓国の漫談、漫才と漫談の相違、黄金期から現在へ、漫才にみる察しの文化

要旨：

現在も多くの人々の人気を得ている日本の漫才に比べ、その漫才と対比できる韓国の漫談は、ほぼ消えようとしている。本論ではこの二つの笑芸の差異に着目し、台本・映像・記録などを素材に総合的に分析した。

漫才は現在もメディアによく登場しているが、漫談は「漫談保存会」でその命脈を保つ状態なのである。本論はこの二つの笑芸が、主に２人組み・会話形式・内容的などの点で類似している反面、方言の使用・ツッコミの有無・主に同士か男女混合か・敬語の使用などの点で相違があるということを示す。また、それぞれの黄金期から現在に至るまで、漫談のほうは特に変化が見られなかったが、漫才のほうは典型的なボケとツッコミ以外にも「ダブルボケ・ダブルツッコミ」、「ボケとツッコミの役割の曖昧化」などの変化が見られた。

さらに本論は、漫才のツボを分析する過程で、漫才を「察しの文化の逆転換」という観点で捉えている。最後に、なぜ漫才は残り漫談は消えていくのかを、上記の比較と漫才の変化を通じて推論する。

3.　江洋（こう　よう・中国）

「災害と多文化共生　－岐阜市・岐阜大学の取り組みを中心に－」

キーワード：多文化共生、東日本大震災、外国人への対応、「岐阜市多文化共生推進等基本計画」、危機管理

要旨：

大震災から生まれた「多文化共生」が現代社会において注目されている。本稿では、多文化共生概念とその変遷を振り返り、全国、岐阜市及び岐阜大学の多文化共生の取り組みを考察し、今後の岐阜地域の多文化共生のあり方を探るものである。

外国人住民に対する災害時の対応については必ずしも十分な対策が講じられていないのが現状であるが、阪神淡路大震災で蓄積した貴重な経験とノウハウを活用し、東日本大震災を機に更なる多文化共生社会の形成に向けた取り組みが必要である。

また、岐阜市の多文化共生基本計画と災害への備えなどを詳しく把握するために、岐阜市市民参画部国際課主任主事にインタビューを行った。ことば、制度、意識という3つの柱となる施策の中、普段から情報提供や体制支援の整備に取り込んでいることや、平常時の多文化共生促進が、災害対策とつながっていることがわかった。

さらに、東日本大震災の被災大学から得られた教訓を、岐阜大学の危機管理の参考として使えると考え、大学におけるより完備な対応や、大学と行政との連携を考察した。

上記を踏まえた上で、岐阜地域の特徴に根ざした多文化共生社会の実現に資する提言を行う。

4.　レネイ・ジューリアン（ニュージーランド）

「日本とニュージーランドの庭園の比較　－池泉庭園と枯山水を中心に－」

キーワード：池泉庭園、枯山水、小石庭園、フランス風の庭、価値観による変化

要旨：

本稿では日本庭園の中の池泉庭園と枯山水、ニュージーランドの小石庭園とフランス風の庭を紹介した。さらに、両国の庭を比較し、価値観による変化の過程を概観した。

一章では、池泉庭園と枯山水について述べた。池泉庭園は浄土宗の影響を受けて池を中心に設計され、石組みや植物が多く、貴族は舟を浮かべて和歌を詠んだり、季節の変化を楽しんだ。枯山水の庭は白砂で自然や禅宗の教義を表す模様を造り、宗教の起源を象徴する石組を置いた。武士や僧は庭で瞑想をした。

二章では、小石庭園とフランス風の庭の特徴を説明した。小石庭園は様々な大きさの小石を使い、模様が造られた庭もあるが、宗教的な影響は受けていない。小石庭園は枯山水とフランスの庭の影響を受けたので、両方の特徴が混じっている。フランス風の庭は幾何学的に設計され、噴水やトピアリーが多い。この調査から４つの庭園は、時代や価値観による変化を受けて独自に発展し、独特な庭園となったことが分かった。

5.　張思思（ちょう　しし・中国）

「海女の仕事と現状　－三重県志摩地区を中心に－」

キーワード：海女、習俗、三重県、高齢化、後継者

要旨：

「あまちゃん」というテレビの連続ドラマを見たことがきっかけで、「海女」という存在を知り、海女に興味を持つようになった。そこで海女の仕事、歴史、習俗、三重県海女の現状とその対策について調べた。

海女は身を守るものと酸素を補給する道具を全くつけずに潜水メガネだけをかけて、アワビオコシで海底の底生動植物を採り、生計を立てる職業である。海女の歴史は古代以前にまで遡ることができるが、海女たちは道具や作業服、海女小屋などを時代と共に、変化させながら海女文化を守ってきた。海女たちが仕事を通して、積み上げてきた力と伝統は今も引き継がれている。

しかし、自然環境の変化や人口減少に伴う地域の変容などによって、現在海女の高齢化現象が進行しており、この職業の従事者数は年々減っている。海女という職業の継承や伝統文化の消失が危ぶまれているため、国も県もこの伝統的な職業を守るために、観光への活用、海女サミットの開催などの対策を講じている。海女の職業が無事に継承されることが共通の願いとなっている。

6.　アダム・フェルト（スウェーデン）

「おまえに本をクレル　－方言における授与動詞「やる」と「くれる」の使用－」

キーワード：「くれる」、「やる」、方言、若者、授与動詞

要旨：

山が多く、海に囲まれた、この長細い日本という島国は、方言のバリエーションを生み出す環境としては恵まれている。様々な方言が存在する日本では、同じ言葉でも方言によって意味が異なったり、活用が異なったりする場合があり、それを説明する歴史が存在している。この論文では、「くれる」と「やる」を中心に方言の視点から論じる。「くれる」と「やる」を標準語と逆の意味で使うことができる地域がある。それらの歴史的変遷や文法、方言の広がり方等から、「くれる」と「やる」の標準語と方言の違いを日本語母語話者ではない筆者が考察していく。

さらに、それらを踏まえて、若者を対象としたアンケート調査をすることで先行研究と違うアプローチを試みた。現代の各地の言葉と標準語との差がどのようになっているか、興味深い結果は出たが、信頼できるデータとするためには、更なる研究・調査が必要である。

7.　ニクラス・ブロムベリ（スウェーデン）

「日本には「徒弟教育」があるか　－日瑞の高校教育における企業実習を中心に－」

キーワード：徒弟教育、企業実習、スウェーデンとドイツの徒弟教育、岐阜県版デュアルシステム、揖斐高版デュアルシステム

要旨：

徒弟教育の理想に近い職業教育を施すドイツの職業教育を参考にして、日本で試行されているのが日本版デュアルシステムである。しかし、日本版デュアルシステムの教育は果たして「徒弟教育」と呼称できるのだろうか。本論文では企業実習に焦点を絞り、岐阜県における日本版デュアルシステムの取組み、とりわけ「岐阜県版デュアルシステム」と「揖斐高版デュアルシステム」を、筆者の自国であるスウェーデンとドイツとの徒弟教育と比較する。その比較を通して、日本版デュアルシステムは徒弟教育と言えるかどうかを解明することを目的とする。

比較の結果、その教育の目的や形態を考慮すれば、岐阜県における日本版デュアルシステムは徒弟教育ではないと言わざるを得なかった。しかし、地域と学校とを結びつける連携を以て、実践的なキャリア教育として肝要な役割を果たしていることがわかった。

8.　楊心怡（よう　しんい・中国）

「オノマトペにおける日本語と中国語の比較　－よしもとばなな『キッチン』を例として－」

キーワード：オノマトペ、象声词、日本語と中国語の比較、よしもとばなな『キッチン』、中国語への日本語の訳し方

要旨：

本稿は、日本語のオノマトペ（擬音語・擬態語）と中国語の象声词の定義を踏まえ、オノマトペの訳し方を分析し、主に、オノマトペと象声词を比較することを目的とした。

はじめに、オノマトペと象声詞について概説した。擬音語と象声词は、物音や人間･動物の声などを模倣して発音する言葉として、定義の類似性があることに注目した。

また、よしもとばなな『キッチン』の日本語版と中国語版を例とし、オノマトペの中国語への訳し方を分析する。擬音語を訳す際には、象声词と対応し訳すことができるが、日本語のオノマトペ、特に擬態語は中国語より格段に豊富であるため、擬態語は形容詞・副詞・動詞・慣用句などに対応させて訳す必要があることが分かった。

さらに、岐阜大学の学生を対象にしたアンケートによって、象声词と擬音語の音韻の近さと、日本人がそれについてどれぐらい把握できるかを調査した。その結果、象声词と擬音語中に、音韻が似ているものと似ていないもの両方が存在することが明らかになった。また日本人にとって、象声词の意味を音韻だけから推測するのは困難であったが、表意文字の漢字を見てある程度推測できることを指摘した。

9.　ルアンシュアムアン・ジェンチラー（タイ）

「長良川鵜飼の文化戦略　－ユネスコ「世界無形文化遺産」への登録は可能か－」

キーワード：鵜飼、各地の鵜飼と長良川の鵜飼、ユネスコ世界無形文化遺産、岐阜県および岐阜市の取り組み、市民の意識

要旨：

鵜飼は日本各地だけではなく世界でも行われているが、長良川の鵜飼は宮内庁式部職鵜匠という格別の由緒を誇り、代表的な鵜飼として認知されている。現在の長良川鵜飼は岐阜県および岐阜市の重要な観光資源に位置づけられており、「ユネスコ世界無形文化遺産」登録を目指すプロジェクトが実施されている。

岐阜県および岐阜市は、切手や土産などの鵜飼に関する商品開発をはじめ、マンホールやポスターのデザインに鵜飼を起用するなど、観光事業の活性化や市民意識の向上に尽力している。しかし、観光者は減りつつあり、市民の意識もまだまだ低いと言える。ユネスコ無形文化遺産へ登録するためには、行政の活動だけでは限界があり、市民一丸となって事業を盛り上げることが必要不可欠である。

本稿では、現在の岐阜県および岐阜市の観光政策の実態から、長良川鵜飼の無形文化遺産への登録の可能性について提言する。

10.　レ・ティ・タン・タオ（ベトナム）

「ベトナム労働力輸出と研修・技能実習制度」

キーワード：ベトナム労働力輸出、研修・技能実習生、収入、仲介料、インタビュー調査

要旨：

ベトナムでは、労働力輸出が拡大している。労働力輸出は、ベトナム人を海外へ一定期間働きに出すことである。その活動の効果で、ベトナム労働者の収入が増加し、ベトナムの失業問題を解決できる可能性もある。主に労働力輸出には 2 つの方法がある。労働者として台湾・韓国・マレーシアなどの国へ働きに行く方法と、研修・技能実習生として日本へ研修・実習に行く方法である。

本論文は、ベトナム労動力輸出の概要、特に日本の研修・技能実習制度について述べる。日本の研修・技能実習制度では、公益財団法人国際人材育成機構（IM Japan）もしくは国際研修協力機構（JITCO）を通して来日する。筆者は、近年ベトナム人研修・実習生が急増している原因を考察した。また、現在日本にいるベトナム人研修・技能実習生へのインタビュー調査を行い、彼らの収入や彼らが来日に際して払った仲介料、日常生活で直面している問題などについて聞いた。